

ロシア語受動構文による事象の概念化に関する考察

The Construal of Event Structure through Russian Passive Constructions

田 中 敦

TANAKA Atsushi

This paper investigates passive constructions in Russian from the viewpoint of Cognitive Grammar (Langacker 1987). The choice of grammatical constructions may reflect a conceptualizer's construal of event structure. A cognitive linguistic approach can explain why we describe active event structures through passive constructions, in terms of both focus and salience vis-à-vis the participants who organize conceptual structures. By means of this approach, a unified motivation for the construal of the causal structure can be demonstrated through a comparative analysis of passive expressions in Russian, English, and Japanese. Also, I will claim that action schema as a linguistic unit can function through different levels of abstraction.

Keywords : 事象認知、概念構造、ロシア語、受動構文、スキーマ

0. はじめに¹

言語は、認知主体である人間が、その認知能力によって経験する世界を記号として表出するものであり、言語表現の構成を分析することにより、認知主体がいかに世界を捉え、解釈しているかを考察することが可能である。

本稿では、以上の立場を踏まえ、受動という言語表現の選択が認知主体のいかなる事象の解釈を反映したものであるかについて、能動的な事象解釈との相違点を踏まえて考察する。

具体的には、因果連鎖という枠組によって認知主体が捉える事象構造に関して、概念化の焦点と構文選択の関係性を、ロシア語の受動構文の例に基づいて分析する。

合わせて、能動表現においては個別参与体間の関係性により具体的な事例として捉えられている行為の概念が、受動表現ではより抽象的な言語知識に即して捉えられている可能

性について言及を試みる。

1. 因果連鎖と構文

現実世界の行為連鎖から、認知主体は概念化の射程 (scope) によって任意の部分切片化し、参与体の際立ちに応じて事象構造を概念化する。

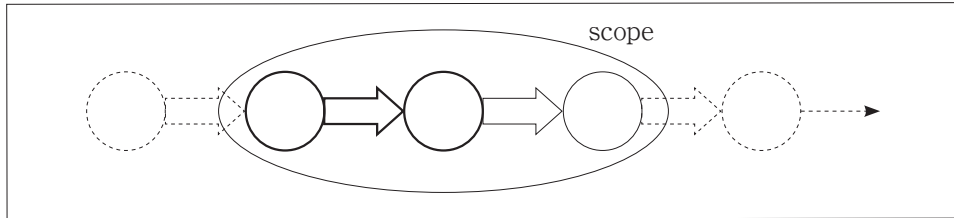
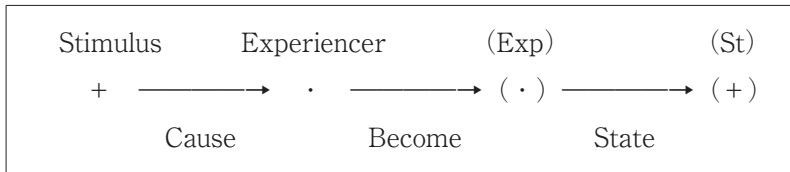


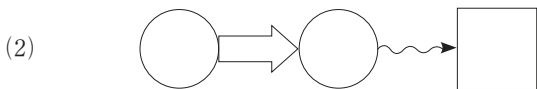
図 1 - 1 (Langacker2002: 215)

この行為連鎖の切片化に対して、因果連鎖 (causal chain) という構造を適用したのとして、Croft(1991)による因果連鎖モデルを挙げることができる。

(1) 因果連鎖モデル

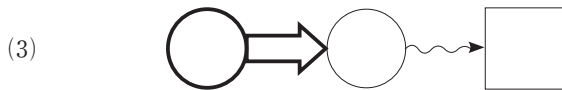


(1)では、事象構造を、ある刺激が客体に及ぶ「作用 (Cause)」の段階、働きかけを受けた客体が状態を変えず「変化 (Become)」の段階、働きかけの結果が客体に現れる「状態 (State)」の段階と、エネルギーの伝達に応じて事象を3段階に捉えている。この構造は、以下のモデルによって図示することができる。(中村1999, 2000)

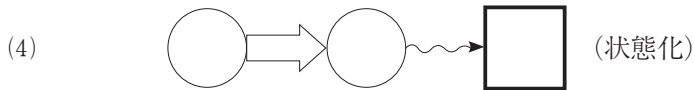


(2)のモデルは、左端の参与体から中央の参与体へとエネルギー伝達が行われ、その結果、中央の参与体にある変化 (○→□) が生じるという一連の流れを表す。

一般に能動構文において認知主体は、エネルギーの源泉たる参与体、すなわち動作主を焦点として事象構造を捉える。(2)のモデルに適用して焦点部分を太線で示せば、能動構文における概念構造は以下のとおりである。



一方、受動表現の機能を、①状態化 ②被動者の話題化 ③動作主の非焦点化(大堀 2002: 163)とし、それぞれを焦点として概念構造に適用するならば、概ね以下のとおり示すことができる。



本稿では上記の概念構造と実際の構文選択の関係について検証するため、具体的にロシア語受動構文の特性に基づいて、概念構造の在り方を考察する。

2. ロシア語の受動構文

ロシア語では、動作主よりも被動者あるいは動作そのものを焦点とする構文として、被動形動詞を用いた受動構文、動詞の再帰形による受動構文、そして不定人称構文が存在する²⁾。

能動文と受動文は一般に置き換えることが可能で、能動文の主語は受動文では造格によって示すことができる。

- (7) a. *Ètot zavod proizvodit stanki.*
 this factory:NOM produce:3SG machine-tools:ACC
 'This factory produces machine-tools.'

- b. *Stanki proizvodjatsja ètim zovodom.*
 machine-tools: NOM produce: REFL this factory: INST
 'The machine-tools are produced by this factory.'

(Pulkina and Zakava-Nekrasova 1994: 476)

受動構文の述語は、動詞に再帰接辞-ся (sja) を付加した再帰形、あるいは動詞から派

生ずる分詞（被動形動詞）の短語尾形による。一般に、能動構文の述語が不完了体動詞の場合、再帰形による受動構文が用いられ、能動構文の述語が完了体動詞の場合には、分詞型受動構文が用いられる。

- (8) a. *Zadanie vypolnjaetsja učenikom.*
 exercise: NOM do: REFL pupil: INST
 'The exercise is being done by the pupil.'
- b. *Važnyj voproc rešěn sobranie.*
 important issue: NOM decide:PP meeting: INST
 'An important issue has been decided by the meeting.'

(Pulkina and Zakava-Nekrasova 1994: 476)

林田(1999)によれば、再帰型受動構文において不完了体の意味するところは、動作そのものの継続ではなく、「動作・作用の結果としての対象の変化の反復性ということに傾く」(林田1999: 114)もので、結果として、対象の一般的・恒常的属性が示されるという。

また、林田は、分詞型受動構文の機能として、①動作・作用の結果としての対象の状態変化の出現 ②変化結果としての対象の継続的状态 の2点を指摘する。

これら受動構文においては、動作主を表す造格は必須とされず、むしろ、口語においては造格を明示することは稀である。

- (9) *V ètom magazine prodaëtsja obuv'.*
 in this shop sell: REFL shoes: NOM
 'Shoes are sold in this shop.'

- (10) *Komnata ubirana.*
 room: NOM tidy: PP
 'The room has been tidied up.'

(ibid., 477)

(9)や(10)のように造格を伴わない受動構文は、不定人称構文で置き換えることができる。

- (11) *V ètom magazine prodajut obuv'.*
 in this shop sell: 3PL shoes: ACC
 'Shoes are sold in this shop.'

- (12) *Komnatu ubirali.*
 room: ACC tidied: PL
 'The room has been tidied up.'

不定人称構文の統語形式は能動文であるが、動作主である主語が明示されないため、行為および行為の対象が焦点となる。不定人称構文においては、動作主を造格で表示して特定することはできない。

ただし、不定人称構文における動作主は、常に不特定多数を表すものではない。極端なものでは、特定可能な個人によって行われた行為でも、不定人称構文が用いられる例がある。

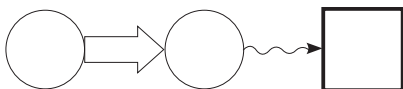
- (13) *Tebe zvonili čas nazad.*
 you: DAT call: PL hour ago
 'They rang you an hour ago.'

- (14) *Prinesli pis'mo.*
 brought: PL letter: ACC
 'A letter was brought.'

(Pulkina and Zakava-Nekrasova 1994: 497)

(13)および(14)では、動詞は複数形の活用を行っているが、動作主は単数であると理解される。不定人称構文は、行為の主体に相当する参与体を明示しないことにより、当該参与体の認知的際立ちを減少させ、他の参与体の際立ちを高めるものであるといえる。

以上で見てきたロシア語の各構文の特性をもとに、先の(4)~(6)の概念構造に当てはめれば、次のとおり仮定することができる。

- (15)  (分詞型受動構文)

- (16)  (再帰型受動構文)

- (17)  (不定人称構文)

続いて、実際の例文に基づいて、各構文が事象をどのように捉えているかを分析し、構

文別に上記モデルを検証するとともに、概念化の動機付けについて考察する

3. 事例研究①（ロシア語作品の英訳テキスト分析）

本節では、ロシア語テキストにおける前述の3種の構文が、英訳された場合いかなる表現で表わされるかについて、『罪と罰』から抜粋した例文に基づいて傾向を分析する。³

3.1. 分詞型受動構文

- (18) *Kogda šči byli prinesseny i on prinjalsja za nix,*
 soups: NOM were bring: PP
Hastas'ja uselas' podle nego na sofe i stala bolgat'.

“When the cabbage soup had been brought in and he had set to work on it, Nastasya seated herself beside him on the sofa and began to chatter away.”

(スープが運ばれてくると彼はそれをすすり、ナスターシャはソファに並んで掛けて話し始めた。)

- (19) *Vse bylo očen' čisto: i mebel' i poly byli otterty pod losk,*
 furniture: NOM and floors: NOM were rub: PP

“Everything was very clean; both furniture and floors had been rubbed until they shone”

(すべてが非常に清潔だった。家具も床も、光るまでに擦られていた。)

(18)および(19)では、行為が完了した結果ある状態が生じ、その状態が継続していることを示すため、英訳では完了形が用いられている。

次に、造格と共起している例を挙げる。

- (20) *Ètot dom stojal ves' v melkix kvartirax i zaselen*
 this building:NOM inhabit:PP
byl vsjakimi promyšlennikami -
 was all jobbers:INST

“This building consisted entirely of tiny apartments and was inhabited by all kinds of jobbers”

(この建物は全体が小さな貸間にわかれていて、あらゆる種類の職人たちが住んでいた。)

(20)では「あらゆる職人」という名詞句が造格によって示されている。英訳でも対応する名詞句はby句によって示されており、それを主格にした能動文に置き換えることが可能である。なお、分詞と共起する参与体は行為の主体ばかりではない。

- (21) *Zvonok brjagnul slabo, kak budto byl sdelan iz žesti, a ne iz medi.*
 bell: NOM was make: PP of tin
 “The bell clanked faintly, as though it were made of tin rather than brass.”
 (呼鈴は銅ではなくブリキでできているみたいに、弱々しく音を立てた。)
- (22) *Belobrysyje, malo posedevšie volosy ee byli žirno smazany maslom.*
 hairs her were smear:PP oil:INST
 “Her whitish hair, which had not much grey in it, was abundantly smeared with oil.”
 (白いものがあまり混じっていない彼女の灰色の髪は、油が濃すぎるほど塗られていた。)

(21)では、前置詞句izに伴われて原材料žestiが示されている。また(22)で造格で示されているmasloは、行為の主体というよりも道具として示されたものであり、英訳では前置詞withによって訳されていることがわかる。

3. 2. 再帰型受動構文

- (23) *Nemnogo spystja dver' priotvorilas' na krošečnuju ščeločku.*
 door: NOM opened: REFL
 “After a while the door opened the merest slit.”
 (しばらくするとドアがわずかな隙間を開けた。)
- (24) *Čto-to soveršalos' v nem kak by novoe, i vmeste s tem oščutilas' kakaja-to žažda ljudej.*
 something:NOM accomplished:REFL
 felt: REFL something like thirst: NOM
 “Something new seemed to be accomplishing itself within him, and one of the things that went with it was a kind of craving for people”
 (何か新たなものが彼の中に生まれ、それと同時に人間への飢えのようなものが感じられた。)

(23)および(24)の英訳では、受動構文ではない表現が充てられているが、行為の主体は完全に背景化している。これは、被動者の話題化を前面に出したものと考えられる。

なお、受動構文として英訳しているものでは、以下の例が挙げられる。

- (25) *V boleznennom sostojanii sny otličajutsja často*
 dreams: NOM characterize: REFL
neobyknovennoju vybuklost'ju, jarkost'ju i črezvyčajnym
 unusual vividness:INST brilliance:INST extreme
sxodstvom s dejstvitel'nost'ju.
 likeness:INST

“When one is in a morbid state of health, one's dreams are often characterized by an unusual vividness and brilliance, and also by an extremely lifelike quality.”

(病的な状態にあつては、夢はしばしば、異常な鮮明さや極端な現実への類似によって特徴付けられる。)

- (26) *počemu tak legko otyskivajutsja i vydajutsja počti vse*
 track down: REFL and find out: REFL
prestyplenija i tak javno oboznačajutsja sledy počti vsej prestypnikov?
 crimes: NOM show:REFL traces: NOM

“why were nearly all crimes so easily tracked down and found out, and why did the traces of nearly all criminals show up so clearly?”

(なぜほとんどすべての犯罪がたやすく探り出され、なぜほとんどすべての犯罪者の足跡がはっきりと現れるのか?)

(25)は、ロシア語では造格によって行為の主体たる名詞句が示されており、英訳においてもby句で表されている。(26)では、行為の主体が明示されていないため、英訳でもby句を伴わない受動文で示されている。

先の(23)、(24)との違いを見るときすれば、因果連鎖における変化の段階を焦点と捉える場合には、英訳では自動詞構文が用いられ、行為の完了と変化状態を中心に捉える場合には、be passive型の受動構文が取られる傾向にある。

この事実から、再帰型受動構文を用いる場合でも、行為に伴う変化を示すばかりでなく、行為の完了と変化状態の継続に比重を置く概念化も存在することが示唆される。

3.3. 不定人称構文

(27) *Nikto takix ne nosit, za berstu zametjat, zapomnjat...*

such: ACC note: 3PL remember: 3PL

“Nobody wears things like this, it would be spotted a mile off, people would remember it...”

(こんな帽子は誰もかぶってない。1キロ先からでも目について、おぼえられてしまう…)

(28) *Za stojkoj naxodilsja mal' čiška let četypnadcati, i byl drugoj mal' čiška*

molože, kotoryj podabal, esli čto sprašivali.

anything: ACC ordered: PL

“Behind the bar there was a boy of about fourteen, and there was also another, younger boy who took the drinks round them when anyone ordered anything”

(スタンドの向こうには14歳くらいの男の子がいて、さらにもっと若い男の子がいて、彼が注文を受けて品物を運んでいた。)

以上の例では、行為の主体は不特定多数と解釈するのが妥当である。主体は完全に背景化し、行為を中心に概念化がなされている。

続いては、行為の主体の範囲が限定され得る例を挙げる。

(29) *Medal'... nu medal'-to prodali... yž davno...*

medal: ACC sold: PL

“The medal... oh, the medal got sold... a long time ago...”

(メダル…メダルなんて売ってしまった…だいぶ昔に…)

(30) *Mal' čik, godom starše ee, ves' drožal v uglu i plakal.*

Ego, verojatno, tol'ko čto pribili

he: ACC beat: PST-PL

“A little boy, who must have been about a year older than her, was trembling in a corner, weeping. He looked as though he had just been given a beating.”

(彼女より1歳年上の男の子が、隅で震えながら泣いていた。たった今ぶたれたばかりのようだ)

(29)は、退職官吏が生活苦のためメダルを換金したことを告白する台詞である。メダルを売ったのは官吏自身であると読み取ることができるが、「売る」に相当する動詞は複数形の活用が用いられ、不定人称構文で表わされている。英訳でも、get passiveの構文を当てることによって、行為の主体は明示していない。

また(30)では、前後の文脈によって男の子をぶったのは母親であると読み取られるが、不定人称構文を用いることによって主体を背景化している。

不定人称構文とは、行為の主体を背景化することによって行為とその対象を際立たせる表現であるが、事象の概念化という観点からは、一定の意思を有して対象に働きかけを行う参与体の存在が前提されていると見ることができる。

4. 事例研究②（日本語作品のロシア語訳テキスト分析）

本節では、日本語の受動表現がロシア語に翻訳される際の構文選択について、事例に即して考察する。テキストは『金閣寺』を用いる。

4.1. 分詞型受動構文

- (31) やがて私は父母の膝下を離れ、父の故郷の叔父の家に預けられ、
edva sojdja s kolen materi, ja byl vynužden
 as soon as leaving from knee of mather I:NOM was force:PP
pokinut' otčij dom i poselit'sja u djadi,
 leave: INF paternal home and settle: INF at uncle
- (32) 機関学校の制服は…、白いペンキ塗りの柵にかけられていた。
mundip kursanta inženernogo učilišča byl povešen
 uniform: NOM of cadet of engineering shool was hang: PP
na vykrašennyj v belyj cvet zabor.
 on panited in white color fence
- (33) 帯革と短剣は、彼の肉体から切り離されて、
kažanoj portupei i kortika --- otdeleanye ot tela svoego xozjaina,
 leather sword and cutlass:NOM separate:PP from body of their host
- (34) 御堂も渡殿も、支える木組も、風雨に洗われて、
I sam xram, i pristrojka, i brevna svaj,
 and self temple:NOM and addition:NOM and log piles:NOM
omytye besčislennymi dožidjami
 wash: PP countless rains: INST

前節同様、分詞型受動構文では、行為の完了によってある状態が出現し、その状態が継続していることが表されている。また、(34)においては、対象に備わる性質や、歴史的事実としての状態性が述べられている。これは、行為の結果としての状態を対象に備わる性質として概念化しているものといえる。またその際、特定の行為の主体は背景化していると考えることができる。

4.2. 再帰型受動構文

- (35) こんな一挿話が思い出される。

Mne vspominaetsja takoj slučaj.

I: DAT remember: REFL such occasion: NOM

- (36) 有為子は自転車に乗ったらしかった。前燈が点けられた。

Ona exala na velosipede, vo mrake svetilas' zažžennaja fara.

she got on bicycle in darkness shone:REFL headlight:NOM

- (37) 証人さえいなかったら、地上から恥は根絶されるであろう。

esli by vokrug ne bylo svidetelej, stydu ne našlos' by

if around not was witness shame: DAT not find: REFL

mesta na zemle!

places: NOM on ground

- (38) その木像は義満の剃髪の後の名、鹿苑院殿道義の像と呼ばれている。

Èta derevjannaja skul'ptura oficial'no imenovalas'

that wooden statue:NOM officially called:REFL

<Statuja Rokuon" indén>...

statue R.

- (39) 小包や雑誌類、本、手紙などが、封も切られずに山と積まれていた。

vysilas' gruda posylok, žurnarov, knig, pisem

stacked:REFL pile of packages journals books letters

(35)は、再帰型受動構文に典型的な、行為に伴う変化の発生を捉えたもので、行為の終了とともに対象の変化も終了するものと読み取ることができる。

対して(36)では、「前燈を点けた」とすればその状態は行為終了後も継続すると考えるのが妥当であるが、ロシア語では、「前燈を光らせた」に相当する表現で訳されており、これは行為に伴う変化の段階といえる。

(37)でも、「恥は根絶される」に対するロシア語訳は、「恥に対して場所を見出さない」という表現に変更のうえ、再帰構文で表されている。

なお、(39)では結果状態が示されているものと解釈するのが妥当であるが、ここでは「積む」という行為が何度も繰り返されたことを示すために再帰構文が用いられているものと推察される。

4. 3. 不定人称構文

(40) 後に金閣と言われた建物である。

kotoruju pozdnee stali nazyvat' Kinkakudzi
which: ACC later happened: PL name:INF K.

(41) その建物も他に移されたり、荒廃したりしたが、

časť razobrali i perenesli na novoe mesto,
part: ACC decomposed: PL and transferred: PL to new place

(42) 住職は来客中なので、二三分待つてほしいと云われた。

Emu otvetili, čto u nastojatelja sečas gost'
he:DAT replied:PL that at chief priest now guest
i nam pridetsja s polčasa podozdat'
and we: DAT need half an hour wait: INF

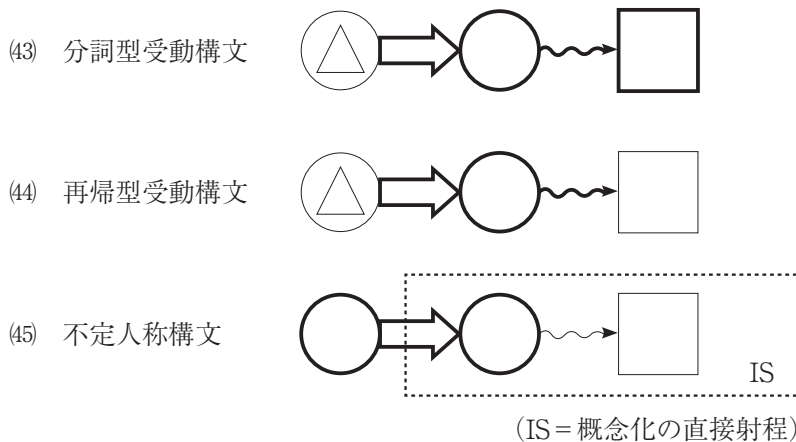
(40)の例文は、再帰構文で見た(38)との類似性が興味深い。両者の動詞はいずれも、対象がある呼称で表す行為である。敢えて区別すれば、(40)で行為の対象である「金閣寺」は広範に知られている仏閣であり、それを当該の名称で呼ぶことは不特定多数の主体に可能である。一方、(38)の仏像の名称は一般に知られるものではなく、対象を話題に挙げたうえで、それに備わる性質として行為が述べられている。不定人称構文が行為を表しているのに対して、再帰型構文は被動者の話題化を示すという対照が見て取られる。

(41)は、日本語の文を見る限りにおいては、行為の完了と状態の発生を示すものであり、分詞型構文によって訳するのが相応しいようにも感じられる。ただし、不定人称構文に訳されたロシア語の文からは、行為の主体の意思を読み取ることができ、建物の移設に際してなんらかの意思が働いたことが、分詞型構文の場合よりも強く表現されている。

不定人称構文の多くにおいては、主体が意思をもって行為を行うことが重要な要素として取り上げられ、対象に変化が及んだか否かは、付加的に扱われている。

5. 分析結果

ロシア語の構文が因果連鎖の中で捉える概念化を、先に仮定したものから、以下のとおり修正する。



分詞型受動構文では、行為の主体である参与体から発せられるエネルギーが、行為の対象側参与体に及び、エネルギー伝達の完了によって対象側参与体に生じた変化状態の継続が事象と捉えられ、概念構造が構成される。変化状態は新たに外的要因が加えられない限り継続するものであり、対象に備わる属性と捉えることができる。

再帰型受動構文では、エネルギー伝達と対象側参与体の状態変化は、分詞型受動構文同様に捉えられているが、行為に伴って生ずる変化が状態として継続する点については必須とされない。再帰型受動構文が表す変化は行為の完了とともに終了し、再び行為とともに反復的に生ずるものであり、結果、状態変化の恒常性が事象として捉えられる。

不定人称構文では、言語表現として現れるのは、行為および行為の対象となる参与体のみであるが、そこに現れる行為には一定の主体による意思性が含まれている。不定人称構文の概念構造では、行為の対象が状態変化を生ずることは必須ではなく、対象側参与体の際立ちは本来高いものではない。ただし、行為の主体である参与体は、行為に対して特別な位置付けを占めるものではなく、その情報価値の低さゆえに概念化の直接射程に含まれないため、対象側参与体が相対的に際立ちを有するものと捉えられる。

(43)から(45)に共通するのは、因果連鎖の出発点を非焦点化し、あるいは概念化の射程の外に置くことにより、概念化の焦点を、行為が及ぶ対象あるいは行為そのものとする点である。概念化の動機付けを整理すると、以下のとおりとすることができる。

- (46) 行為の影響を受ける対象を中心に因果連鎖を捉え、行為の結果として対象にいかなる状態が生じているかを示すという動機付け（分詞型受動構文）
- (47) 行為の影響を受ける対象を中心に因果連鎖を捉え、行為が対象にいかなる影響を及ぼし得るかを示すという動機付け（再帰型受動構文）

- (48) 主体が対象に行う行為を中心に因果連鎖を捉え、行為の主体を直接的な概念化の範囲の外に置く動機付け（不定人称構文）

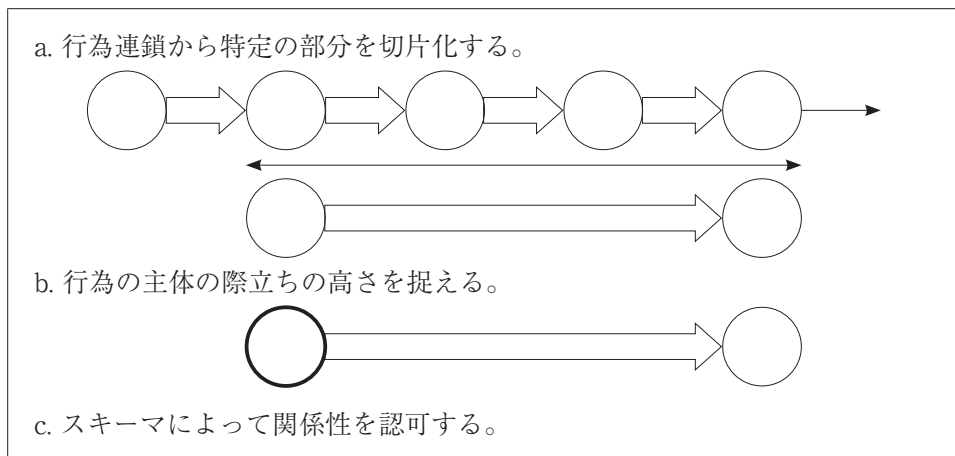
6. 受動と行為のスキーマ性

分詞型受動構文と再帰型受動構文の概念構造モデルにおいて、因果連鎖の出発点である参与体中に表示した△は、行為の主体の不特定性を示す。そこでは行為は個別の事例としてではなく、行為スキーマとして捉えられているものと仮定する。

スキーマは事例から抽出され、一方、事例はスキーマによって認可される。認知主体は行為事象を経験することにより、それらに共通する抽象的な行為スキーマを形成するとともに、この行為スキーマによって新たな行為事象を認可する。

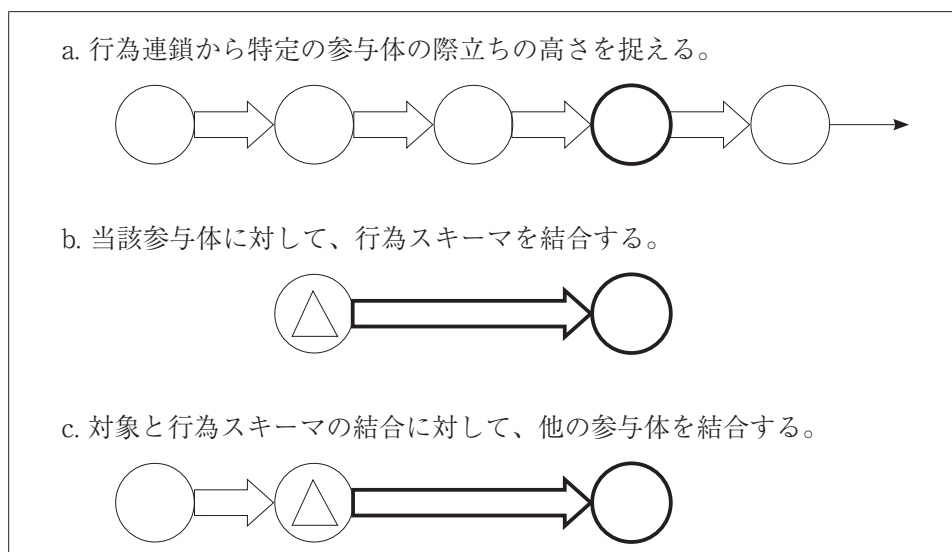
能動的なプロセスの概念化は、スキーマによって個々の事例を認可する認知手順である。認知主体は、行為の主体としての参与体と行為の対象としての参与体の間に特定の関係性を認める際、自らが有するプロセススキーマによって参与体の関係性を認可する。この際、行為連鎖上の任意の参与体を選択することが可能であり、選択された参与体間の関係性を捉えるために、行為の射程は拡大・縮小し得る。

- (49) 能動プロセスの認知手順



一方、受動では、事例としての関係性を行為スキーマによって認可するのではなく、単独の参与体に対して行為スキーマを結び付けていると捉えることができる。

(50) 受動の認知手順



このように仮定することにより、受動表現の特徴を説明することが可能である。

まず、行為連鎖において、特定の参与体の際立ちの高さを捉えるためには、なんらかの原因が必要であるが、当該の参与体に変化が生じているということがその一因となり得る。また、スキーマによる事例の認可ではなく、スキーマそのものを適用することにより、行為の主体として特定の参与体を必要としないことにより、特定の主体が解釈できない受動構文の例を説明することができる。

さらに、他の参与体との結合をおくことにより、行為の主体のみならず、同一の行為連鎖上に存在するものであれば他の参与体を結合することも可能とし、受動構文における参与体の多様性を説明することができる。

なお、不定人称構文のプロセスは能動的なもので、行為は参与体間の関係性としてスキーマによって認可される。行為の主体を背景化し、行為および行為の対象を焦点化するという共通性を有しながら、行為をスキーマによって認可された事例と捉えるか、スキーマそのものと捉えるかによって、概念化のあり方は根本的な差異を有する。

7. 結語

本稿では、受動という概念化に際して認知主体がいかなる動機付けを有するかを明らかにするため、事象構造を因果連鎖によって捉え、状態化、被動者の話題化、ならびに動作主の背景化、という観点に沿って整理することを試みた。

その結果、受動とは一連の行為連鎖の中で、際立ちを有する参与体を中心に為される概念化であるとし、その際立ちが因果連鎖における変化によってもたらされることを明らかにした。併せて、受動表現が表す行為が、個別事例ではなく、認知主体が有する行為のス

キーマによるものと解釈できる可能性を提言した。

問題点としては、事象の捉え方を一様のものでしたため、事象の下位区分に基づいた詳細な考察が十分でなかった点、ならびに、事象の捉え方を能動と受動という観点に限定したため、自他交替等の観点に欠けた点などが挙げられる。

こうした問題点を踏まえ、今後はさらに対象言語および構文の幅を広げ、類型論的な立場から認知主体が事象を捉える枠組とその動機付けを明らかにすることを課題としたい。

引用文献

【罪と罰 (1866)】

Dostoevskij, Fedor Mixajlovič. 1981. *Prestuplenie i nakazanie*. Xaborovsk: Xabarovskoe Knižnoe Izdate'stvo.

David Mcdoff. 1991. *Crime and punishment*. London: Penguin Books.

【金閣寺 (1956)】

三島由紀夫. 2003. 『金閣寺』 東京：新潮社.

Grigorija Čxartišvili. 2000. *Zalotoj xram*. Sankt-peterburg: Azbuka.

参考文献

大堀壽夫. 2002. 『認知言語学』 東京：東京大学出版会.

中村芳久. 1999. 「ヴォイス・システム：態間関係の認知メカニズム」『金沢大学文学部論集. 言語・文学篇』 19. 39-65.

———. 2000. 「認知文法から見た語彙と構文：自他交替と受動態の文法化」『金沢大学文学部論集. 言語・文学篇』 20. 75-103.

林田理恵. 1999. 「ロシア語受動構文の意味と機能」『ロシア・東欧研究』 3. 103-142.

———. 2000. 「ロシア語における「主語」と「主題」そして「主体」について-(3)受動構文」『大阪外国語大学論集』 22. 15-53.

———. 2001. 「ロシア語受動構文と不定人称文」『ロシア・東欧研究』 7. 71-117.

Croft, Willam. 1991. *Syntactic categories and grammatical relations: the cognitive organization of information*. Chicago: The University of Chicago Press.

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. 1; Theoretical Prerequisites. Stanford: Stanford University Press.

———. 2002. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. 2nd edition. (1st edition 1991) Berlin: Mouton de Gruyter.

Pulkina I. and Zakhava-Nekrasova E. 1994. *Russian A Practical Grammar with Exercises*. 6th edition. (1st edition 1979) Moscow: Russky Yazyk Publishers.

注

- 1 本稿は、平成21年度に新潟大学大学院現代社会文化研究科に提出した修士論文から事例研究の一部を抜粋し、加筆・修正を加えたものである。
- 2 受動の機能に類する他の構文として、動詞の2人称活用形による「普遍人称構文」、3人称のいわゆる仮主語を立てた「非人称構文」が存在する。
- 3 第3節のロシア語例文には英訳を付記しているため、紛らわしさを避け、ロシア語例文の略号は、分析上必要な単語に限定する。